

◇◇放置竹林問題から都市に身近にある眠れる資源を考える◇◇

今夏、福岡県北九州市のNPOが開催した都市近郊の放置竹林の伐採活動に参加し、約40人のボランティアとともに竹の伐採・搬出をして心地よい汗を流した。このNPOは、竹林の放置・荒廃による生物多様性の損失（それまであった樹木を枯死させる等）を憂い、約12年前から毎月1回、竹林伐採イベントを開催している。北九州市は、市レベルでは日本最大の竹林面積を有しているが、そのほとんどが放置されている状況にあるという。

放置竹林問題は、西日本を中心に各地で顕在化している。かつて日本の里山の竹林は、日本人の暮らしに欠かせない身近な資源（竹竿や筍生産等）であり、主に農家によって管理されてきた。それが、竹資源に代わる代替品の登場等によって経済的な価値を失い、更には管理する農家の高齢化・後継者難もあって、放置されるようになってきた。その結果、各地の里山で竹が自然と分布を拡大して、周辺への浸食が広がるケースが多数報告されている。竹林の拡大による果樹園や茶畑への農業的被害、生物多様性の衰退、地滑り発生の助長、保水機能の低下、加えて里山景観の喪失等のさまざまな問題が指摘されている。

一方、竹林・竹材を資源として有効に活用する試みも見られる。その活用の範囲は、旧来の木材代替（建築資材や生活資材等）に加えて、電気や熱の源となるバイオマス燃料や、竹の持つ繊維質を生かした新たな素材等、多岐にわたる。例えば、山口県では、竹を「地域のエネルギー作物」として捉え、木質バイオマス発電向けの竹材の収集・運搬・燃料化モデルの実証・構築に着手しようとしている。また、前述の北九州市のNPOや市民ボランティアが伐採した竹材は、地域の企業に提供され、地元の産学官の連携によって新たな商品・サービス（竹繊維の特性を生かした化学肥料を使わない法面緑化材・工法）に活用されている。このように、今日ではまったくといって良いほど活用されていなかった竹林・竹材は、再び資源として見直されてきている。

竹林・竹材が資源として見直される背景には、「竹林・竹材の持つ再生産能力の高さ（3～5年で成竹化し、数十年を要する樹木と比べて圧倒的に早いサイクルで利用可能）」、「人工林に要する手間・育林コストが不要なこと（地下茎による無性繁殖によって、伐採の翌年には自生する）」、「短期間での成長プロセスにおける大量のCO₂吸収」等がある。これらの特質ゆえに、持続可能で環境に優しい資源として見直されている。

これに加えて筆者は、竹林・竹材が“都市の身近”にあることに着目したい。実は、日本の竹林面積は森林面積の1%にも満たない。それにもかかわらず放置竹林に係る問題が盛んに話題にのぼるのは、竹林が人の暮らしに近く、人の目につきやすい存在であることを意味している。すなわち竹林・竹材は、今や、『都市の身近にある眠れる資源』と言えよう。

2013年7月に発売された『里山資本主義－日本経済は安心の原理』で動く（角川 one テーマ21）」が反響を呼んでいる。筆者も、岡山県真庭市や欧州の林業地域・中山間地域における眠れる地域賦存資源を活用した再生モデルに興味深く読んだ。都市においても眠れる資源を活用できるのではないかと、その資源のひとつが竹林・竹材ではないか、と思いを馳せるようになった。

竹林・竹材の活用にあたっては、「竹林の不在所有者の問題」、「竹材の伐採・搬出コストの問題」、「竹材の利用方法（出口）の検討」、「安定供給可能なシステムの検討」等の克服すべき問題や課題がある。都市に身近にある眠れる資源活用による再生モデル構築に向け、引き続き動向に注視するとともに、課題克服に資する仕組みづくりに知恵を絞りたい。

平成25年12月 社会システムコンサルティング部 生駒 公洋